

民はモーセが山から 一向に下りて来ようとしないのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。われわれをエジプトの地から導き上った、あのモーセという者がどうなったのか、分からないから。」(32:1)

——— 先立って行く神々が欲しい (1～6) ———

この 32 章は旧約聖書の中でも、良く知られている話が書かれています。内容は、モーセが神様からの石の板を受け取るために山に登ってから、なかなか帰って来ないので、すっかり心細くなった人々は待ちきれずに、アロンに頼んで神様を造ってもらう、という話です。

今イスラエルの民は、モーセが山に入ってから 6 週間近く経って、目に見える指導者がいなくなった時、不安になったのでしょう、かつて彼らがエジプトで偶像礼拝を行っていた時の、目に見える神を礼拝したいという欲求が持ち上がって来ました。イスラエルの民は、まだ信仰者としては大人ではありませんでした。神様に結びついていませんでした。指導者がいれば神に従う、いなければ適当に生きるのです。私たちはどうでしょう。常に神様の前に忠実でしょうか？ いつも主の前に誠実に歩み続けて行く者でありたいですね。

(2 節) イスラエルの人々にとっては、モーセは神様のような指導者でした。そのモーセがいなくなったので、民はアロンの所にやってきました。しかし、民を鎮（しず）めることに自信のなかったアロンは、民の要求に従いました。「あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪を外して、私のところに持って来なさい。」

そこまできつく言えば、たぶん民は自分の大切な装身具を手放すことをためらうであろうと思ったからでした。アロンは民を甘くみていました。

(3 節) ところがなんと、彼らはアロンのことばに従ってしまいました。「民はみな、その耳にある金の耳輪を外して、アロンのところに持って来た」のです。もう造るしかありません。今イスラエルの民はこれらの金でなつかしい偶像を造ろうとしています。

(4 節) 「彼（アロン）はそれを彼らの手から受け取ると、のみで鋳型（いがた）を造り、それを鋳物の子牛にした。彼らは言った。『イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神だ。』」

——— 混合宗教 ———

今、イスラエルの民が造った鋳物（いもの）の子牛の偶像は、当時の異教の世界では、ごく普通にどこにでもあるものでした。民は言いました。「これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神だ。」実はイスラエルの民は、まことの神の代わりに子牛を神としたのではなく、この子牛の背後におられる神を拝もうとしているのでした。人々は言います。

「子牛は見えない神をお乗せしているのだ。」子牛は目に見えない神様をお乗せする台座でした。おみこしみたいですね。これはまことの神への礼拝と偶像礼拝との混合宗教でした。

(5 節) 更にアロンは子牛の祭壇を築いて、罪を犯しました。「アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼びかけて言った。『明日は主への祭りである。』」アロンは神を汚す偶像、子牛を宗教的な雰囲気の中で、その偶像に、礼拝を献げる様にと民に奨（すす）めています。アロンは今、完全に自らを失っておりまして。

——— 心の欲望のままに ———

(6 節) 「彼らは翌朝早く全焼のささげ物を献げ、交わりのいけにえを供えた。そして 民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯（たわむ）れた。」どんちゃん騒ぎです。偶像礼拝は常に肉欲をはらんでいます。民の皆は「自分たちは、主に礼拝をしているのだ」と言っています。しかし、それは詭弁（きべん）です。彼らは皆、自分たちの欲望を満たすために偶像に礼拝をささげているのです。もちろん、飲食をすることは、礼拝する時に禁じられてはいませんでした。しかし、ここで描かれている騒ぎは、もちろん霊的なものではありません、肉的なものでした。現代の教会の祝会、愛餐会とは全く異なっています。人々は今、自らの情欲のおもむくままにたわむれ、底抜けのバカ騒ぎに夢中になっていました。このような光景は、いつも偶像礼拝にはつきものでした。

この様に騒いでいる、彼らはあきらかに十戒の第二戒「あなたは、自分のために偶像を造ってはならない。・・・」を破ったのでした。

——— モーセの最初のとりなしの祈り (7～14) ———

「(7) 主はモーセに言われた『さあ、下りて行け。・・・あなたの民は、墮落してしまった・・・

(9) わたしはこの民を見た。これは実にうなじを固くする民だ。(10) 今は、わたしにまかせよ。・・・わたしが彼らを立ち滅ぼす・・・。』(11) しかしモーセは、自分の神、主に嘆願して言った。」モーセは懸命に、次の3つのことを神様に祈ります。

・第1、今、神様が滅ぼそうとしている民は、神ご自身が、あのエジプトの地から、救い出されたご自分の民です。

・第2、神様がその民を滅ぼされるならば、エジプト人から神ご自身が笑われるでしょう。

・第3、アブラハム、イサク、ヤコブに与えられた祝福の契約の約束は今もこの民の上に生きているはずです。

(11B～13) (14) 「すると主は、その民に下すと言ったわざわいを思い直された。」

(詩篇 106 篇 23 節) 「・・・神は『彼らを根絶やしにする』と言われた。もし 神に選ばれた人モーセが 滅ぼそうとする激しい憤りを収めていただくために 御前の破れに立たなかったら どうなっていたことか。」この詩篇のみことばのとおりです。モーセはイスラエルの民と、神様との仲保者として、とても大きな働きをしました。それは、まさにイエス様のような仲介者としての働きでした。この祈りによって、モーセは民を救いました。

——— モーセの怒り (15～20) ———

しかし、神様にとりなしの祈りを献げたモーセでも、実際に山から下りて来た時に、民が歌い、金の子牛の前で踊り狂っているのを見て、怒りが爆発しました。モーセは山から大切に持って来た、神様からいただいた律法（十戒）の石板を地に投げ捨て、砕いてしまいました（19）「宿営に近づいて、子牛と踊りを見るなり、モーセの怒りは燃え上がった。そして、手にしていたあの板を投げ捨て、それらを山のふもとで砕いた。」これが、本当の義憤だと私は思うのです。まさに正義から来る憤りです。

モーセの怒りによって、石板は砕かれてしまいました。ということは、律法（十戒）を失ってしまったのです。イスラエルの民が、受けうる最大の刑罰は、神の律法を失うことでした。一時的ですが、今、みことばが取り去られました。

でも神様の憐れみでしょうか？（20）モーセは偶像である金の子牛を火で焼いた後、「・・・それを粉々に砕いて水の上にまき散らし、イスラエルの子らに飲ませた。」ある方の結婚式に出席した時、金粉のスープがでました。出エジプトのこの時の出来事を思い出しました。

——— 追及されるアロン (21～29) ———

（21 節、読む）モーセはアロンを追求しました。モーセはこの事件の原因がイスラエルの民にある事をすぐ見抜きました。しかし、モーセのいない時の責任者アロンはすべて民の責任を負わなければなりません。

（22、23 節、読む）しかし、大変残念なのですが、アロンは自らの過ちを素直に認めませんでした。民に転嫁しています。アダムとエバが罪を犯した時と同じです。それだけではありません。子牛がいつの間にか出来上がったかの様に言い訳をしています。

この時、とても残念なことが起こりました。（24、25 節、読む）アロンのだらしない指導力、信仰生活、罪のなすり合い。実はこれらすべてを山のくぼみに潜（ひそ）んでいたアマレク人は一部始終を見ていました。今、アロンは敵の物笑いになっていました。

アロンは 2 つの失敗をしました。① 罪を他人に転嫁しました。② 寓にもつかない言い訳もしました。本当に残念です。

アロンは確かに臆病で、魅力のない指導者でした。彼は愚かな民の言いなりに負けて、言われるがままに行動してしまいました。それだけではありません。自らの罪を民のせいにしたのです。それにしても、イスラエルの民が、異教の民の物笑いになっているとは、こんなに証にならないことはありません。

私たちも、日々の生活の中で同じ失敗をしていないでしょうか？

- ・ある方は、祈らないで食事をして、未信者の友から注意をされました。
- ・ある方は、人前で怒ってしまい、未信者の方から、逆に諭（さと）されてしまいました。
- ・ある青年、日曜日にトラブルがあって、思わず「今日は行かない」と言っていました。親から「これ位のことで休んではいけないよ」と言われました。ちょっと恥ずかしいですね。

——— レビ人による神の裁き ———

(26～29) さて、ここにおいてモーセは一大決心をしました。それは、「悔い改める者には救いを。そうでない者には滅ぼす」と言われた、神様の命令を実行することでした。

(26 節)「そこで、モーセは宿営の入り口に立って、『だれでも主につく者は私のところに来なさい』と言った。すると、レビ人がみな彼のところに集まった。」ところが、今、モーセのとった呼びかけにもかかわらず、多くの民は、なおもバカ騒ぎを続けていました。

(27～29 節)「レビ族はモーセのことば通りに行った」その結果、その日のうちに約三千人が殺されたのでした。

この時、レビ人は剣によって、宿営の中を行き巡って、これらの罪を犯した者たちを殺しました。そこには人間的な同情、感情、人情はありませんでした。ただ、神様の指示通りに決断し行動し、実行しました。

この時以来レビ族は、主に忠実な者と認められ、祭司の部族となる道を進むことになります。

——— モーセの愛、モーセ再度のとりなし (30～35) ———

(30 節) レビ人の協力によって、罪を犯した者が裁かれましたが、その後にモーセは再度、神様に民の罪のとりなしをしなければと決意しました。モーセは次の様に語っています。「・・・もしかすると、あなたがたの罪のためになだめをすることができるかもしれない。」このモーセのことばを聞いた時、私は彼がえらい自信を持っているように見えました。しかし 32 節を読みますと、そうではないことがわかります。

(32 節)「・・・しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」ここで、モーセは神様の前でいのちがけで祈っています。

この祈りによって、イスラエルの人々は再度救われるのでした。

(33、34 節)「主はモーセに言われた。『わたしの前に罪ある者はだれであれ、わたしの書物から消し去る。しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に民を導け。見よ、わたしの使いがあなたの前を行く。』」主は再度、約束の地に行けと指示し、しかも主の使いが民を導く、と語ります。モーセのいのちをかけた祈りがイスラエルの民を救ったのでした。

パウロも同胞イスラエルの為に次の様に祈りました。

(ローマ 9:3 節)「私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」

モーセは今、神様に心からの願いを伝えています。「主よ、私はあなたから呪われて捨てられて、地獄の底に突き落とされようとも、主よわが同胞をお救いください。」

モーセのとりなしの祈りは、パウロの祈り、そしてイエス様の祈りへと続きます。

そして、今も主イエス・キリストは、神の右の座から、私たちの救いの為に父なるお方に、とりなしの祈りをなさっておられます。